

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 入善町立入善西中学校・教諭・関口 智也
- 2 研修期間 令和5年8月29日(火)～令和5年9月6日(水) 9日間
- 3 調査研究課題 個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けたドイツ・デンマークの学校教育の在り方とICT活用について
- 4 研修期間等
オーストリア：市内視察
ド イ ツ：ミュンヘン市教育・スポーツ局
在ミュンヘン日本国総領事館
ワトグ・ユルテンパル商工会議所アーレントレーニングセンター
Zeiss 本社
デンマーク：デンマーク国立博物館
デンマーク王立図書館
ホイデバンゲンス学校
ガメルヘレロップ高校
在デンマーク日本国大使館

5 研修の概要

一人一人の生徒にとって学校や学級が最適な居場所となり、将来のウェルビーイングの向上につながるためには、学校現場の環境づくりや適切な支援が必要である。今回のドイツ・デンマークの教育制度を知ること、日本の子供たちの成長のために、自分自身に何ができるのか、周りにどのような働きかけをすることができるのか。自分自身の教師像を見つめ直し、より質の高い指導力を身に付けていく機会にしたいという思いがあった。

(1) ドイツの教育制度について

ドイツの教育制度の大きな特徴は、小学校4年生を終えた10歳のときの成績(数学、ドイツ語、社会)や適正に応じて、ギムナジウム(大学進学希望者が進む学校)、レアルシューレ(卒業後、職業教育学校に進む人、中級の職に就く人が進む学校)、ハウプトシューレ(卒業後、就職して職業訓練を受ける人が進む学校)、統合制学校(上記3つの学校形態を包括した学校)に振り分けられる複線型教育である。ミュンヘン市教育・スポーツ局を訪問した際に、10歳で振り分けられるこの制度について、どの学校の卒業資格をもっているかによって、その後の進路に大きな影響を及ぼすことが分かった。また、学校での職業教育と企業での職業訓練の両立による「デュアルシステム」や高い技術力をもったスペシャリストを育成する「マイスター制度」があり、ドイツには将来を見据えた職業教育が構築されており、大変充実した教育制度であると感じた。



デュアルシステム(①2日間学校・1日職場 ②9週間毎に職場または学校)によって、学校と職場の両方で学ぶことができる制度となっている。このシステムによって、小さい頃から専門職へのあこがれや職業観が身に付くシステムが構築されていることが分かった。一方、介護職やパン職人といった特定の分野の専門家や教員不足があり、手に職を付けた人材不足や教員不足には、日本と共通した部分があると感じた。

マイスター制度におけるマイスターとは、金属、電気等の専門職があり、高い技術力だけでなく、組織の責任者として製造プロセスをより理想化できる力、商品のクオリティを高める力、会社を成長させる経営力等の様々な力を兼ね備えた人材である。日本では各企業がそれぞれにもつ研修システムによって人材を育成しているが、学校や企業、商工会議所等、教育界と経済界が協働・連携することによって人材を育成するというシステムに日本との違いを感じた。ドイツでは早期段階から、企業がよりよい人材の育成に一翼を担うシステムがあることが分かった。

(2) ホイデバンゲンス学校

ホイデバンゲンス学校の中学生から「毎日宿題はあるのか。」「宿題はたくさんあるのか。」「もし生徒が遅刻したら、どうなるのか。」「身体障害等のハンディキャップを抱えた生徒には、どのような対応をしているのか。」といった中学生らしい素朴な疑問について質問を受けた。子供たちは自分たちの学校のよさについて、「先生たちが、自分たちの希望することを聞いてくれる。」「私たちのことを考えてく

れている。」「サポートが厚い。」という返答をした。先生方が一人一人のことを考え、コミュニケーションをとり、しっかりと一人一人と向き合いながら接していることが伺えた一面であった。生徒は疑問に感じたことを素直に質問したり、思ったことを積極的に答えたりする印象を受けた。

先生方からは、「中学校での働き方はどのような感じですか？」という質問を受けたので、「授業と給食、清掃、部活動指導があり、夕方までは必ず学校にいます。」と答えると授業以外の業務内容が多いことに大変驚いていた。16時前には生徒全員が帰宅し、サッカー等の地域クラブの活動に参加する生徒もいるとのことであった。

見学した授業は、保護者の外交関係等の仕事により異国から移住してきた生徒やイラク難民として移住してきた生徒が、デンマーク語の基礎を学ぶものであった。ウクライナ出身の生徒とロシア出身の生徒が同じ教室で仲良く学習する姿を見て、一人一人の人権を大切にする気持ちや思いやりをもって接する姿勢の大切さを改めて実感した。

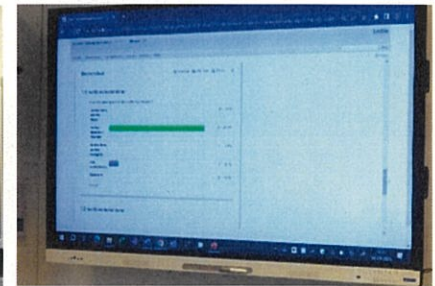
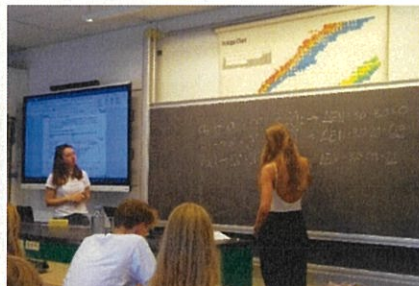
子供たち一人一人の幸福追求や自己実現を目指し、将来社会で役立つ子供たちの育成を目標に「子供たちが学校へ来るのが楽しいと思えるように関わり合っている。」「子供たちの可能性を伸ばせるように接している。」という教育方針がとても共感できた。



(3) ガメルヘレロップ高校

化学の授業では、過酸化水素の分解の反応速度についての実験結果の考察を行っていた。生徒自身が10分程度説明していた。その中で、生徒同士の話し合い活動や先生からの補助発問によって、話し合う内容を深めていっており、主体的で対話的な深い学びにつながる質の高い授業を見る機会となった。生徒が発表したり、お互いに相談し合ったりすることが当たり前環境になっていた。生徒の自発性や主体性を生かす教育が、学校、地域、家庭で共通して行われており、そんな国民性の一角を学校での授業でも見ることができた。物理、化学、生物、音楽に長けた人材育成も担う学校で、そのような人材を育成し、大学進学へつなげると、学校運営費を国から予算としてもらえるというのが印象的であった。

また、生徒一人一人がICTを利用し、自らの考えを選択して、すぐにデータ集計ができるソフトを活用していた。授業の中で、生徒は自らの意見や考えをパソコンで書き込むなど、生徒一人一人が持参したそれぞれのパソコンを使うことが当たり前になっていた。ICTの活用が現任校よりも普及し、授業の中でも効果的に活用されていると感じた。



海外教育事情視察を終えて、これまで通り生徒と関わる中で、「生徒が話す言葉にどんな意味があるのか」「何を伝えたいのか」等、生徒を受け入れる心が広がり、これまで以上にゆとりをもって話を聴くことができている。「生徒一人一人を見つめ、育てる」という富山県の教育方針に照らし合わせてみたときに、一人一人の個性や可能性を生かしたり、生徒の願いや困り感を感じ取ったりするその感度を教師一人一人が上げていくことで、生徒にとって学校が居心地の良い居場所となり、将来のウェルビーイングの向上につながると感じた。そのためには、日頃から生徒の可能性やよさを引き出す場面や方法を考えて、よく観察し、環境づくりや適切な支援を行っていく必要である。そのために、自分自身に何ができるのか、周りにどのような働きかけをするとよいのかを考える機会となった。

最後に、このような研修の機会を与えてくださった方々に感謝し、持続可能な社会の創り手となる子供たちの育成と自分自身の成長につながるように、今回の貴重な学びを今後の教育実践に生かしていきたい。